

## PROGRAM NOTE

2011

### 近藤譲：薔薇の下のモテット

12 人の声のための

### Motet Under the Rose

for 12 Voices

Vox humana からの委嘱によって 2011 年の 6 月に作曲されたこの作品は、蒲原有明 (1875~1952 年) が 1908 年に出版した詩集『有明集』の中に収められている「底の底」を歌詞としている。

「底の底」 蒲原有明

底<sup>そこ</sup>の底<sup>そこ</sup>、夢<sup>ゆめ</sup>のふかみを  
あざれたる泥<sup>ひぢ</sup>の香<sup>か</sup>孕<sup>ほら</sup>み  
わが思<sup>おもひ</sup>ふとこそ浮<sup>うか</sup>べ。

浮<sup>うきなわ</sup>漚<sup>わ</sup>のおもひは夢<sup>ゆめ</sup>の  
大<sup>おほよど</sup>淀<sup>ど</sup>のおもてにむすび、  
ゆららかにゑがく渦<sup>うづ</sup>の輪<sup>わ</sup>。

滞<sup>とどほ</sup>る銹<sup>さび</sup>の縁<sup>みどり</sup>に  
濃<sup>こ</sup>き夢<sup>ゆめ</sup>はとろろぎわたり、  
呼<sup>い</sup>息<sup>ま</sup>づまるあたりのけはひ。

涯<sup>はて</sup>もなく、限<sup>かぎり</sup>も知らぬ  
しづけさや、— 聲<sup>こゑ</sup>さへ朽<sup>く</sup>ちぬ、  
あなや、この物<sup>もの</sup>うきおそれ。

浮<sup>うきなわ</sup>漚<sup>わ</sup>はめぐりめぐりぬ、  
大<sup>おほよど</sup>淀<sup>ど</sup>のおもてに鈍<sup>お</sup>びて  
たゆまるる渦<sup>うづ</sup>の輪<sup>わ</sup>のかけ。

物<sup>もの</sup>うげの夢<sup>ゆめ</sup>の深<sup>ふか</sup>みに  
魂<sup>たましひ</sup>の失<sup>う</sup>せゆくひまを、  
浮<sup>うきなわ</sup>漚<sup>わ</sup>のおもひは破<sup>や</sup>れぬ。

## PROGRAM NOTE

朽<sup>く</sup>ちにたる聲<sup>こゑ</sup>張<sup>は</sup>りあげて  
わがおもひ叫<sup>きけ</sup>ぶとすれど、  
空<sup>むな</sup>し、ただあざれしにほひ。

涯<sup>はて</sup>もなきこの静<sup>しづ</sup>けさや、  
めくるめくおそはれごち、  
涯<sup>はて</sup>もなき夢<sup>ゆめ</sup>のとろろぎ。

但しこの作品では、ほぼ全曲を通じて、複歌詞的な——即ち、複数のパートが同時に異なった歌詞を歌う——書法が採られているために、歌詞は明瞭には聴き取れない。

日本近代詩の先駆者の一人である有明の詩作品の特質は、気品の高い整った形式性と、その形式美の光に照らし出されて白日の下に曝される生々しい内的感情の象徴性にあるように思われる。そして、この「底の底」での美しい言葉運びからは、心の底に潜む何かしら秘密めいた、得体の知れないもの(感情)の徴が浮かび上がってくる。それは、明確に聴き取られ、意味を理解されるための言葉ではない。このテクストを複歌詞的に扱った理由は、そこにある。

タイトルにある「薔薇」は、西洋では、「秘密」の象徴。「薔薇の下で」(ラテン語で、sub rosa)は、「内密に」を意味する。又、「モテット」は、もともとフランス語の 'mot' (「言葉」)に由来する伝統的な曲種名。ルネサンス時代を中心に複歌詞的なモテットが数多く書かれたことはよく知られている。

近藤 譲

初演：2011年9月12日 ヴォクスマーナ第25回定期演奏会（東京文化会館小ホール）

初演者：ヴォクスマーナ

委嘱：ヴォクスマーナ

出版：University of York Music Press (UK)

録音：ALCD-115

演奏時間：9分